

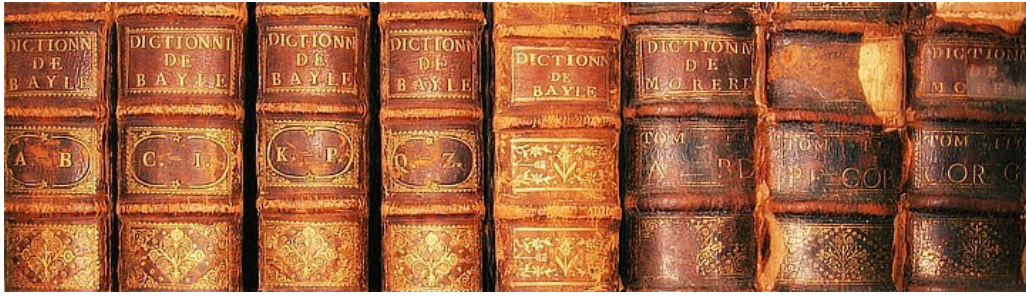
文学部

フランス語フランス文学研究室

進学ガイド



フランス語フランス文学研究室
HP : <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/>
Tel : 03-5841-3842
Fax : 03-5841-8966
e-mail : futsubun@l.u-tokyo.ac.jp



フランス語フランス文学研究室紹介

「フランス語のテキスト」という対象

「フランス語フランス文学」と聞いて、あなたは何を思い浮かべますか。バルザック、フローベール、プルーストといった小説家の名前でしょうか。ボードレール、ランボー、マラルメといった詩人の名前でしょうか。それとも『三銃士』や『海底二万マイル』や『星の王子様』といった子供にも親しまれる作品でしょうか。もっと時代を遡れば、一六世紀のラブレーとモンテーニュの時代から、思想家（デカルト、パスカル）・劇作家（コルネイユ、ラシーヌ、モリエール）を輩出した一七世紀を経て、モンテスキュー、ルソー、ディドロらが続々と現れた一八世紀までの西欧文化史上の有名人たちを思い浮かべる方もいるでしょう。あるいは、実存主義（サルトル、カミュ）から構造主義・ポスト構造主義（フーコー、ドゥルーズ、デリダ）へと連なる二〇世紀の思想家たちのことを考えてもかまいません。

フランス語フランス文学研究室（以下「仏文」）では、こうしたフランス語で書かれたさまざまな作品を幅広くとりあげます。つまり、「フランス語フランス文学」が対象とするのは、詩・小説・戯曲・批評といった狭い意味の「フランス文学」だけではなく、現在では哲学・歴史・文学・社会科学といったさまざまな学問領域に分かれた「フランス語のテキスト」一般です。実際、ルネッサンス期以来、フランス語の書き手たちは、さまざまな領域で、それぞれの領域の創設や革新に携わってきました。俗語で哲学書を著した先駆者デカルトや、現代的な意味での「世界史」の創始者の一人ヴォルテール、さらには言語学・人類学・精神分析・フェミニズムの領域でソシュール、レヴィ=ストロース、ラカン、ボーヴォワールたちが果たした知的変革など、実例は枚挙にいとまがありません。

仏文では、特に学部学生のあいだは、特定の作家や作品の研究に視野を限定せず、翻訳を介してでも「フランス語のテキスト」の広がりについて知見を深め、自分自身の関心を発見することを推奨しています。

文学部三号館



総合図書館の隣、
文学部 3 号館 3 階のワンフロア全体が仏文研究室です。
自習や仏文の人たちとおしゃべりできる辞書室があり
助教室ではコーヒーやお茶、お菓子をご用意しています。
いつでも研究室を訪ねてくださいね。



「ことば」から出発する

ただし、仏文では、こうしたさまざまなジャンルで書かれたフランス語のテキストを、既成の学問体系のなかで整理するのではなく、あくまでもそこに書かれた「ことば」を丁寧に読み取り、それぞれの個性をそなえたテキストや書き手の思考を、忠実に深く理解することから出発します。そのことが、あるテキストについて現在の私たちにとっても刺激的な新しい解釈を提案したり、自分自身で新たな作品や思考を創造したりするために欠かせない一つのステップだと考えるからです。そのためには、フランス語と直接触れ合い、この外国語をほとんど肉体的に我が物にしなければなりません。しかしそれはまた、「ことば」を通じて「テキスト」の外のさまざまな「コンテキスト」—フランスやヨーロッパの文化や歴史のみならず、さらにその外のさまざまな背景—に触れるきっかけにも、日本語で書き、考えてきた自分自身の常識を揺るがせる手がかりにもなるはずです。

「読むこと」と「書くこと」へのアプローチ

とはいえ、そもそも「テキスト」を「読む」こと、そして「テキスト」から出発して新たな理解や解釈を「書く」こととは、いったいどんな行為なのでしょう。この点について、フランス語の書き手たちは、自覚的に反省を重ねてきました。一九世紀以来のフランス近代詩・近代小説の流れは、この「読むこと」「書くこと」そのものについての批評的考察と切り離せないと言ってもよいほどです。その延長線上に、二〇世紀のフランス語圏では、ヴァレリー、ブランショ、バルトといった批評家たちや、アルチュセール、デリダといった哲学者たちが、それぞれ個性豊かな理論的考察を生み出し、同時代の書き手たちと刺激しあって仕事をしてきました。彼らの仕事はけっして使い回しの効く批評や思想史の「方法論」ではありませんが、仏文では、こうしたフランス語圏で生まれた批評的・理論的考察も積極的にとりあげながら、私たち自身がどのようにテキストにアプローチできるのか、そしてどのようにテキストについて書くことができるのか、その「手つき」も学びます。その学びは、「フランス語のテキスト」のみならず、日本語はじめ諸言語で記されたテキストや現象を対象とする際にも、必ずや独自の視座を提供してくれるでしょう。

「フランス」から見る近代・現代の世界

しかし、なぜフランスなのか—二〇歳前後の若い学生のみなさんは、ほとんどの日本人にとって縁の薄い外国語で書かれたテキストを専門的に学ぶことに躊躇するかもしれません。けれども「フランス語フランス文学」はけっしてフランス語を母語とする人たちだけのものではありません。近世・近代を通じて、フランスは西欧列強の一角を占めながら、政治的にはほぼつねに二番手の位置に甘んじてきました—あるときは神聖ローマ帝国やスペインの競合相手として、あるときはイギリスやドイツの競合相手として、またあるときはアメリカ合衆国とソヴィエト連邦に対する第三極として。往々にして、フランス語の書き手たちがそれぞれの時代の支配的潮流からは距離をとり、批判的でもあれば少々ひねくれてもいるスタンスをとったのも、一面では、このフランスの特殊な地位に根差してのことでした。

フランスはまた、一八世紀末の革命以降、一九世紀を通じて、激しい政治的動揺を経験した国でもありました。この近代世界最大級の政治的動揺のなかで、フランス語の書き手たちは、近代社会がもたらした功罪をその内側から生きてきました。一九世紀以来のフランス文学や、二〇世紀後半のフランス哲学・思想が、し

ばしば同時代の政治や社会と鋭い緊張関係を持ちながら、自分たちが生きている時代を対象化し、吟味しようとしてきたのもそのせいです。そのなかからは、スタール夫人、ボーヴォワール、サルオート、デュラスといった女性作家たちも生まれました。「ポスト近代」が語られるようになって久しい現在でも、自分自身のいる時代や社会を、その内側から自己言及的に問い直すという近現代のフランス語の書き手たちのスタンスは、けっして古びることのない力をそなえています。

フランス革命の余波のなかではハイチ共和国が生まれ、また二〇世紀後半の脱植民地化は、フランスの植民地帝国をあらかた解体しました。近年では、こうしたフランスの外のフランス語圏の書き手の仕事も、フランス語フランス文学研究の枠内で取り上げられるようになっていきます。アフリカ・中南米・ケベックなど、西欧の外で書かれたフランス語のテキストを開拓することも、これからのフランス語フランス文学研究にとっては重要な課題です。

「汝の欲するところをなせ」―「東大仏文」の自由闊達さ

明治以来の日本でも、しばしば翻訳を通じて「フランス語のテキスト」の魅力に導かれ、それに触発されて、数多くの日本語の仕事がなされてきました。その意味では、「フランス語フランス文学」はたんにヨーロッパ西端の異国の文化遺産ではなく、日本語で生活する私たち自身の文化の一部になっていると言ってもよいでしょう。

周知のように、「東大仏文」からは、小説では太宰治（中退）、大江健三郎、松浦寿輝、堀江敏幸、詩では天沢退二郎や入澤康夫、文芸評論では小林秀雄、澁澤龍彦、蓮實重彦、鹿島茂、野崎歓といった人々が続々と世に出ました。作曲家（三善晃）や音楽批評家（吉田秀和）、映画作家（吉田喜重）や映画批評家（蓮實、松浦、野崎）、アニメーション作家（高畑勲）も「東大仏文」の同窓生です。これだけ多種多様な書き手・芸術家が「東大仏文」から巣立っていった背景には、領域横断性や方法論上の先鋭性、あるいは社会に対する批判的關係を特徴とする「フランス語のテキスト」を専攻する学科ならではの自由闊達さがあります。東大仏文はアカデミックな研究の世界でも水準の高さを誇ってきましたが、他方で、「フランス語のテキスト」から刺激を受けとって自分自身の領野を切り開き、新たな創造を行う学生たちをつねに応援してきました。その精神を、渡辺一夫はラブレールの一句で見事に言い当てています―「Fay ce que voudras 汝の欲するところをなせ」。一人でも多くの学生が、この自由闊達な精神を受け継ぎ、「フランス語のテキスト」の新たな魅力を発見してくれることを祈っています。





「仏文・・・興味はあるけどちょっと不安、、、」
そんなあなたの質問に仏文生やOBがお答えします！



ずばり、就職状況は？文学部は不利ってイメージがあり不安です、、、

過去の卒業生の主な就職先は、以下の通りです。

講談社 文藝春秋 共同通信 読売新聞 アイ出版 NHK テレビ東京 静岡放送
大和証券 大和総研 東レ ソフトバンク Google JSOL JX 鹿島建設 福岡
銀行 大鵬薬品 JR 東海 東京大学職員

卒業生の8割が就職し、大学院に進学するのは2割程度となっています。

以前は仏文で学んだ批判精神を生かして新聞・出版業界に就職するひとの割合が高かったのですが、現代では多岐にわたるジャンルの職種に就職しています。

「毎日原稿を読む生活をしていると、いつのまにか仏文で学んだ読み方をしている自分に気がきます。もし将来何らかの形で文章に携わる仕事をしたいと考えるならば、仏文は悪い選択ではないと思います。」（仏文OB 文藝春秋勤務）

「仏文の魅力は何といっても『人』にあります。・・・中略・・・確かにフランス文学はビジネスに直結する学問ではありません。しかし、経済や法律といったものは就職に応じて自力で勉強できます。一方で個性豊かな仲間に囲まれてのフランス文学の勉強は大学以外ではできません。

将来フランス文学で食べていこうと考えているひとと、就職してビジネスの世界で生きていこうと考えているひとと、仏文を進学先として考えてみませんか。仏文での2年間は人生の絶妙なスパイスになること間違いありません。」（仏文OB 大手金融機関勤務）



フランス語が出来なくても大丈夫ですか？

大丈夫です。

第二外国語がフランス語ではなかったひとと毎年仏文に進学しますが、みな毎日の講義やその予習・復習を通してフランス語の力を身につけてゆきます。なかには、そのまま大学院に進んでフランス文学の先生として活躍しているひとといます。

「先輩で、スペイン語選択だったひとがいたんですが、卒業論文をフランス語で書き上げたとき驚きました！フランス人の彼女もできたみたい。」（学部4年 理科二

類出身）

また、文学部では全学部生向けにフランス語初学者のための授業が開講されているので、本郷に来てから基礎的な文法や読解法を学ぶことも可能です。さらに、ネイティブの先生によるフランス語での購読と作文の演習を通して、読むだけでなく話したり書いたりといった実践的な表現力を鍛えることもできます



留学制度はありますか？

はい。

2008 年度からジュネーヴ大学への留学生派遣制度が設けられました。毎年 1 名、学部学生をジュネーヴ大学に秋から 1 年間派遣、一流の教授陣の講義・ゼミに出席して、フランス語の習得に励むと同時に文学研究の基礎的知識・方法論を学んでいました。現在では全学交換留学制度に代わりましたが、これまで通り仏文とジュネーヴ大学との結びつきは強く、留学は有利です。また、ジュネーヴ大学の他に、学部学生にはパリ第 8 大学、グルノーブル・アルプ大学、ストラスブール大学への留学制度が整えられています。有意義な留学生生活を満喫した後の進路は、大学院で研究を続けたり、社会に出て活躍したりと様々です。

【交換留学経験者の声】

私は、自由な学風で知られるパリ第 8 大学に 1 年間留学しました。文学科のプログラムは幅広く、19 世紀フランス詩を中心に、小説講読や言語学の講義も受講しました。また語学の授業では、ディベートやフランス語圏作家の紹介などを通して、他者理解のための生きたフランス語を学ぶことができました。講義がない日には美術館や教会に足を運び、パリ中を歩き回りました。多くの小説の舞台であり、また芸術家の集う都市でもあったパリに住むことができたことも、貴重な体験だったと思います。（学部 4 年生）



正直に言ってフランス文学や思想、哲学にあまり詳しくないです、、、

全く問題ありません。

仏文の学生は、文学系のサークルに所属しているひとから運動会でサッカーに打ち込んでいるひとまで実に様々です。仏文に進学した理由も「それまで翻訳を通してフランスの小説に親しんでいたり、『近代』という思想の起源に興味があったりといった文学研究を志して来たひとといえば、海外勤務に憧れるのでフランス語を読みこなせるようになりたいという実学志向のひともあります。さらには何と『フランス文学』という言葉の持つ卑猥な響きに惹かれて来たという不純な動機の持ち主もいますね。」（学部 4 年 サドを読んで進学）
各々が自分のやりたいことを見出せる場所、そのために勉強できる場所、それが仏文なのです。

「本や映画の知識に乏しくても周りの人が親切に教えてくれます。好きな作家が学科に進んでから見つかる例だって珍しくありません。実際、大学 4 年生になるまで見たことも聞いたこともない作家で卒論を書こうとしている人もいます。たとえ動機がふわふわしたものに過ぎなくても、これがやりたい！（もしくはやりたいんじゃないか）というモチベーションがあれば、是非飛び込んできてください。」（学部 4 年 二外はロシア語でした）

何かを学びたいと思った瞬間から、仏文の門戸は開かれるのです。





仏文には3人の専任教員がおり、個性豊かな講義を展開しています
ここでは各教員をご紹介します



塚本昌則 教授 (TSUKAMOTO Masanori)

専門

- ・ポール・ヴァレリーを中心とした20世紀文学、詩学の観点から研究している
- ・絵画や写真といったイメージの言語化の方法の追及にも力を注いでいる

講義

- ・19世紀から20世紀の文学を、いわゆる小説に限らず幅広く扱う。キーワードは「自伝」「虚構」
- ・ユルスナール『黒の過程』、ポール・リクール『時間と物語』などを題材に扱う



塩塚秀一郎 教授 (SHIOTSUKA Shuichiro)

専門

- ・クノー、ペレックを中心とした20世紀文学
- ・遊戯・自伝・日常・空間などコンセプチュアル・アートに関連する視点から現代文学を考察

講義

- ・イヴァン・ジャブロンカ『歴史は文学である 社会科学のためのマニフェスト』、ネルヴァル『シルヴィ』などを題材に扱う



王寺賢太 教授 (OHJI Kenta)

専門

- ・18世紀いわゆる「啓蒙」の時代の思想と文学：モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、レナル/ディドロ、ケネーなど
- ・20世紀フランスの社会思想史：アルチュセール、フーコーなど

講義

- ・モリエール『人間嫌い』、ヴォルテール『哲学書簡』などを題材に扱う



浜永和希 助教 (HAMANAGA Kazuki)

専門

・フランス近代詩

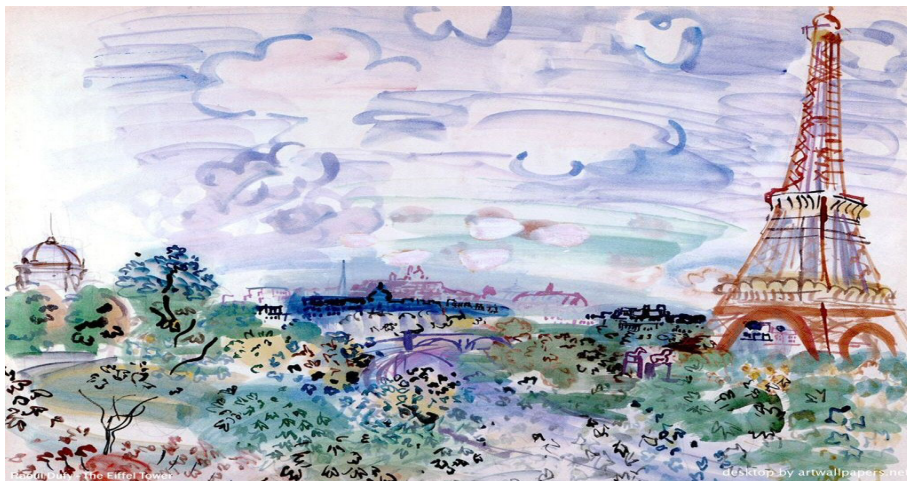
・ランボーを中心として、19 世紀後半の詩人たちの作品を美学的観点からのみでなく、倫理的観点からも考察することで、19 世紀前半のロマン派の運動とのあいだの連続性と断絶の解明を目指している

上記以外にも毎年外部からの先生の講義が 5 コマほど開講されます。

そして仏文ではほとんどの講義が 15 人以下。

場合によっては 5、6 人ということも。

距離が近く、密度の高い 105 分間です！



2018 年まで仏文研究室で教鞭をとられていた中地先生のお言葉です。中地先生のみなさんへのメッセージがつまっています。ぜひご一読ください！

あなたがあなたになる場所 中地義和

三十数年も前に駒場生であった自分について語ろうとすると、気恥ずかしさが先にたつ。人に語れるほど決然と、鮮やかな選択ができたわけではない。気の向かないものを除けていけば、いつしか、何となく、今の道に踏み込んでいたというのが正直なところだ。それに、当時もやもやしていたものも、文字にすると妙に整理されて白々しい明快さをまといかねない。それはともかく、すでに進路を決めて迷うことのない一、二年生にはこんな駄文は無用だ。しかし、何をしようか、どこに行こうかと思案している学生には、多少のヒントになるかもしれない。そう思い直して記憶の糸を手繰ってみよう。

1972 年春、明確な動機付けのないまま文科一類に入学した。都会育ちの同級生たちのスノッブなもの知り顔を前に、文化的コンプレックスは深刻だった。当時 900 番教室で行なわれていた法哲学や刑法概論の授業を覗くと、開始の三十分も前から教壇に近い数列に席取りのかばんがずらりと並んでおり、自分にはとても入っていけない世界のように思われた。親の説得という難題はあったが、ゴールデン・ウィーク明けには情けないほどあっさりと言学部進学の意味を捨てていた。それから一年あまり、進振りのころまでは、根無し草の心細さのなかで過ごした。

大方の授業は単位を落とさない程度に流したが、語学だけはまじめに出た。ヘンリー・ジェイムズの小説、テネシー・ウィリアムズの戯曲、ウォルター・ペイターの評論など、それぞれの教官が好みに応じて選ぶ（それが大事だ！）英語講読がおもしろかった。それ以上に興味を覚えたのは初修のフランス語で、数カ月で基本文法を終え、いきなりモンテルランの戯曲や歴史家リュシアン・フェーヴルの雄弁な講演文を、註もなしに、今よりはるかに性能の劣る仏和辞書を片手に読んだ。今にして思えば、岩塊をハンマーで崩していくような荒業だった。読解にははるかに繊細な鉋や鑿が必要で、しかもそれらを精錬する作業は果てしなく続くものだと思い知るまでに、そう時間はかからなかった。しかし、外国語を同化する際のほとんど身体的な征服感覚が味わえるのは、初級から中級を短期間で駆け抜ける駒場時代だと思う。

「傍系進学」で文学部に来る道はあのころも開かれていたはずだ。しかし十分に調べもせずに、文一からは「底なし」の教養学科フランス科に進んだ。当時フランス語教官の大半は仏文出身で、授業構成も文学色が強かったから、駒場にいながらにして環境は仏文に近かった。そこでフランス人教師から教わったのは、文学テキストの一節を克明に読み解き、解説する「エクスプリカシオン・ド・テキスト」の作法と、特定の題目をめぐってとくに論述の構成面に注意を払いながら自分の考えを表す小論文（ディセルタシオン）であった。作品の背景となるコンテキストと作者の意図を踏まえたうえで、習いはじめて日の浅い言語で論理的構成を意識しながら論評する訓練である。どちらの訓練でも、わずかな分量の読み書きに、当人の教養と知力の総体が（欠如が！）どうしようもなくあらわになる。小学校以来作文といえどもっばら身辺雑記か感想文で、論理的文章の書き方など教わった覚えのない身にはひどく困難に思えたが、また新鮮な刺激でもあった。

やがて仏文大学院に進み、フランスに留学するにつれて展望も変わる。（正一反一合）の展開を推奨する小論文や、一つのパッセージを舐めるように多方向から照射する註釈が、あくまでもフランス式文学教育の一環であって文学研究そのものではないこと、入ってのちに出るべき型であることがわかってきた。もともと速読濫読よりも遅読味読を好み、小説の筋立てや作品から抽出できる「思想」よりも文章の筆触や勢いに惹かれる性分の人間にとって、明晰さを金科玉条とするフランス式にはなじみにくい部分があった。しかしこの抵抗感との長い付き合いが、何にもまして自分を鍛えてくれたように思う。

三十数年前と較べて、大学は大きく変わった。社会のなかの大学であるからには、社会の変容とともに大学が変質するのは当然かもしれない。しかし、産学連携どころか産学官の連携を推進する昨今の大学は、かつての学問の府のピューリタニズムからそのモラルを百八十度転換した。大学は今やグローバルな経済システムにすっぽりと組み込まれている。つねに新しい企画や組織構想を打ち出すことが求められ、成果が数値化される。ところが文学部は、学問の性格上そうした趨勢に最も適応しにくい学部であり、不用意に適応することは学問としての存立を危うくしかねない。また、文学部に進学してくるかなりの学生は、いわゆる成果主義や競争とは無縁なところで、自分の関心を開拓したいと願っているように思う。それぞれの専修課程は、独自のディシプリンを備えているが、それはすべての学生に一律に課されないし課しようもない。たとえば先に紹介した「エクスプリカシオン・ド・テキスト」や「ディセルタシオン」の授業は、仏文でも用意されている。しかしフランス語の聴き取りに苦労したり稚拙なフランス語を書くよりは、もっばら日本人教員による訳読の授業で単位を満たしたいと思う学生も少なくない。その場合にはそれが十分可能なように編成されている。

要するに、望むだけのトレーニングの場は提供されるが、強制されないのである。目立ちたくなければ隠れていられる。顔も見たことのないような学生がすばらしい卒論を出してくることもある。文学部での二年間はあなたの思うように組み立てればよい。要は、それを人間としての底力をつけるための時間にすることだ、あなたがあなたになるための時間に。